北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

小学生の家事手伝いに関する研究

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2022-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, みゆき, 杉浦, 麻佑 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007103

北海道教育大学紀要（教育科学編）第72巻　第２号　　令 和 4 年 2 月
Journal of Hokkaido University of Education（Education）Vol. 72, No.2　　February, 2022

小学生の家事手伝いに関する研究

岡田みゆき・杉浦　麻佑*

北海道教育大学旭川校家庭科教育研究室

*北海道岩見沢東高等学校（非常勤）

Study on Housework of Elementary School Children

OKADA Miyuki and SUGIURA Mayu*

Department of Education, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

*Iwamizawahigashi High School, Hokkaido

概　要

子どもの頃の家事手伝いの経験が，大人になったときの人間性や学力，経済状況と関係していると言われている。つまり，家の仕事を手伝うことは，子どもの様々な成長のみならず，将来，充実した人生を送ることにもつながる重要な経験と考えられる。そこで，家でどのような家事手伝いをしているのか，家庭科の授業で学習したことが，家事手伝いに生かされているのかを検討するために，小学校高学年を対象に調査をした。結果は，以下の通りである。

・料理や食事準備，食事の後片付けなど，「Ｂ日常の食事と調理の基礎」の家事手伝いが最も多かった。
・自由な時間や家族と過ごす時間が多いと家事手伝いをする回数が増えるが，大きな学校行事があると家事手伝いの回数が少なくなった。
・全ての月で，男子よりも女子の方が家事手伝いの回数を上回っていた。
・家事手伝いに関するワークシートは，児童が家事手伝いをするきっかけや家事手伝いを継続する要因になった。

１．研究の目的

国立青少年教育振興機構は，幼児期から義務教育修了までの各年齢期における多様な体験と，それらを通じて得られる資質・能力の関係性を把握し，学校や地域，家庭において，どの年齢期にどういった体験が重要になるのかを明らかにするために，千葉大学教育学部教授の明石要一らとともに，青少年の発達段階に応じた適切かつ効果的な体験活動の推進に関する調査研究を実施した[1)]。子ども頃の体験を「自然体験」，「動植物との関わり」，「友達との遊び」，「地域活動」，「家族行事」，「家事手伝い」の６項目，体験の力を「自尊感情」，「共生感」，「意欲・関心」，「規範意識」，「人間関

係能力」,「職業意識」,「文化作法・教養」の７項目に分類し，子どもの頃の体験と体験の力との関係をみたところ，子どもの頃に「家事手伝い」の体験が多い人ほど，大人になってからの「自尊感情」,「共生感」,「意欲・関心」,「規範意識」,「人間関係能力」,「職業意識」,「文化作法・教養」といった体験の力が高いことを示した。また，子どもの頃の「家事手伝い」が多いほど最終学歴が高く，年収が多いことも示した。さらに，研究の中で「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」と子どもの頃「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」,「食器をそろえたり片付けたりしたこと」,「家族で家の大掃除をしたこと」との間に相関関係がみられ，そして「できれば社会や人のためになる仕事をしたいと思う」ことと「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」,「家族で家の大掃除をしたこと」との間にも相関関係がみられると述べている。

この他，子どもの家事手伝いと子どもの成長との関連については，以下の先行研究がある。深谷ら[2)]は，現在の子どもはどのような家事手伝いを行っているのか，そして，家事手伝いをすることは子どもの成長にどのような意味をもっているのかを明らかにすることを目的とし，子どもと母親を対象とした調査や，時系列を追った比較調査，さらには手伝う子の自己像の分析を行った。時系列を追った比較調査では，1984年と2011年，奈良，大阪の小学校４～６年生を対象に行い，その結果，2011年の子どもの方が家で家事手伝いを行っており，さらに，家事手伝いをする男子が増加していることを明らかにした。1984年当時は，性的な役割分業が家庭の中に定着しており，ほとんどの家事の担い手は母親であったが，2011年には家族を取り巻く情景が変わり，多くの父親が家事に加わるようになり，そのような父親の姿を見て，男子も家事に参加し始めたと深谷らは分析している。さらに,「手伝う子ども」と「手伝わない子ども」と違いを明らかにさせる調査では,「手伝う子ども」はテレビ視聴時間が短く，しっかりと勉強をしている子どもが多いことを指摘した。手伝いと勉強との関連については，洲脇・宮地[3)]も述べている。また，深谷ら[2)]は友達が多いことや，努力するという明るい自己像を抱く子どもであることも明らかにしている。その他，高橋，山本[4)]も「手伝う子ども」は生活習慣がしっかりとし，自分に自信を持ち，将来に明るさを感じていて，「手伝い」は家庭が充実し安定しているかを示すバロメーターになると述べている。

山口県教育委員会[5)]は,「お手伝いの定着」を重点的に啓発するために，山口県内の児童・生徒の「お手伝い」の実態や保護者の意識を把握する目的で，アンケート調査を行った。保護者の調査結果から，子どもに継続して「手伝い」させることで，子どもに様々な変化が見られることを指摘した。例えば,「責任感がうまれた」,「言われなくても自分から進んで手伝いをするようになった」,「自分の役割だという自覚をもつようになった」,「手伝いをすることが習慣になった」,「家族の一員としての自覚が出てきた」,「家族それぞれの大変さを理解するようになった」,「家族に感謝の言葉をいうようになった」,「家族を気遣うようになった」などの変化である。また，子どもに手伝いをさせる際，保護者は，感謝の言葉をかけるようにすることや，子どもにあった手伝いをさせる，手伝いをした後にほめてあげるなどの気遣いをしていることが多かった[6)]。そして，そのような保護者の中には，子どもに「家族で助け合って暮らしていることを理解してほしい」,「責任感や自立心を養ってほしい」,「達成感や人の役に立つ喜びを味わってほしい」などの回答があり，子どもに対する願いやそのような意識が，子どもの「手伝い」に影響していると考えることができる。

このように，子どもの頃の家事手伝いの経験が学習，規則正しい生活習慣，友達関係，明るい自己像，責任感[7)]や家族への感謝や思い，大人になったときの人間性や学力，経済状況と大きく関係していると言える。つまり，子どもの頃の体験，特に，小学校高学年から中学生までに家の仕事を手伝うことは，子どもの様々な成長のみならず，将来，充実した人生を送ることにもつながる重要な

経験と考える。

それでは，子どもたちは，実際どのような家事手伝いをしているのだろうか。横溝らの研究によると[8]，就学前は配膳や食器下げ，洗濯物をかごに入れる程度だが，小学校高学年頃から，自室の片付けや掃除をするようになり，手伝いの幅が広がると報告している。梅田・大桃[9]は子どもの家事手伝いは，家族が集う食事の場面が中心であると指摘する。ただし，横溝らは家事手伝いの内容や質は，保護者の意識[10, 11]や父親の家事参加とも関連性があると指摘している。つまり，子どもの家庭でのお手伝い行動の重要性については指摘されているが，その実態やその要因についての研究は少なく，全貌は解明されていない。とりわけ，衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して学習することによって，日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけ，生活における自立の基礎を培い，家族や近隣の人々と協力して，自分の生活をよりよくしていこうと工夫する能力と実践的な態度や豊かな人間性を育てること目的としている家庭科との関連性について検討している研究は見当たらない。

そこで，手伝いの幅が広がるという小学校高学年の家事手伝いの実態を調査する。特に子どもは家でどのような家事手伝いをしているのか，家庭科の授業で学習したことは家事手伝いとして，習慣的に家庭で実践しているのかを検討したい。さらに，子どもの家事手伝いを習慣づけるために，小学校家庭科の中で教師は子どもに対し，どのような働きかけを行っていけばよいかなど，家庭での実践につながる授業についての検討も行っていきたい。

２．研究の方法

⑴　調査対象と実施期間

調査対象は，Ｈ大学附属小学校の６年１組（男15名，女21名），６年２組（男14名，女19名），計69名（男29名，女子40名）である。

家事手伝いの調査は，2014年４月から10月まで行った。４月の最初の家庭科の授業で配布し，記入欄が埋まった児童には随時，新しいワークシートを配布し回収した。

家事手伝いに関するアンケート調査は，2014年12月に授業時間内で実施した。回収率は100％である。

⑵　調査内容

家事手伝いの調査では，ワークシートを配布し，児童に家事手伝いをした日付と内容を記入させ，毎回の家庭科の授業で回収した。また，１枚当たり30個ある記入欄が，全て埋まった児童については，新しいワークシートを配布している。提出は強制ではなく，児童の意思に任せ，家事手伝いをして，ワークシートに記入した児童にだけ，提出させた。また，家事手伝いの基準については，児童が家族のためにしたと，自分で思うもの全てのことをさし，簡単にできることから，時間や労力を費やすことまで全てを記入するよう指導した。

次に，家事手伝いをしても，家事手伝いに関するワークシートに記入しきれない児童がいることから，家事手伝いに関するアンケート調査を児童全員に行った。どのくらいの頻度の家事手伝いをするのか，どのような家事手伝いをするのか，家事手伝いのワークシートについてどのように思うかを尋ねた。

⑶　分析方法

児童が行った家事手伝いの内容は，平成20年公示の「小学校学習指導要領家庭編」[12]に記されている内容に沿って分類した。兄弟の世話や，肩もみなど家族とのかかわりに関する家事手伝いを「Ａ家庭生活と家族」，料理や食事準備などに関する家事手伝いを「Ｂ日常の食事と調理の基礎」，洗濯や掃除，片付けなどに関する家事手伝いを「Ｃ快適な衣服と住まい」，消費生活やゴミの分別などの環境に関する家事手伝いを「Ｄ身近な消費生活と環境」に分類し，ＡからＤのどの分野にも分類できない内容を「Ｅその他」とした。

分野別家事手伝いの状況，月別の家事手伝いの回数，家事手伝いの男女差をグラフにまとめ，家庭科の授業時数や授業内容，学校行事，子どもの

様子と関連付けながら分析した。

アンケートについては，単純集計のみである。

３．結果と考察

⑴　分野別家事手伝いの状況

図１は，家事手伝いの回数を「Ａ家庭生活と家族」，「Ｂ日常の食事と調理の基礎」，「Ｃ快適な衣服と住まい」，「Ｄ身近な消費生活と環境」，「Ｅその他」に分類した結果である。一方，表１は，５つに分類した時の家事手伝いの内容を示した。

図１より家事手伝いの内容ＡからＥの割合は，「Ｂ日常の食事と調理の基礎」が45％で最も高く，続いて，「Ｃ快適な衣服と住まい」が42％，「Ａ家庭生活と家族」が10％，「Ｅその他」が２％，「Ｄ身近な消費生活と環境」が１％となっている。

一方，表１から，５つの分類の中で最も種類が多い家事手伝いは「Ｃ快適な衣服と住まい」で23

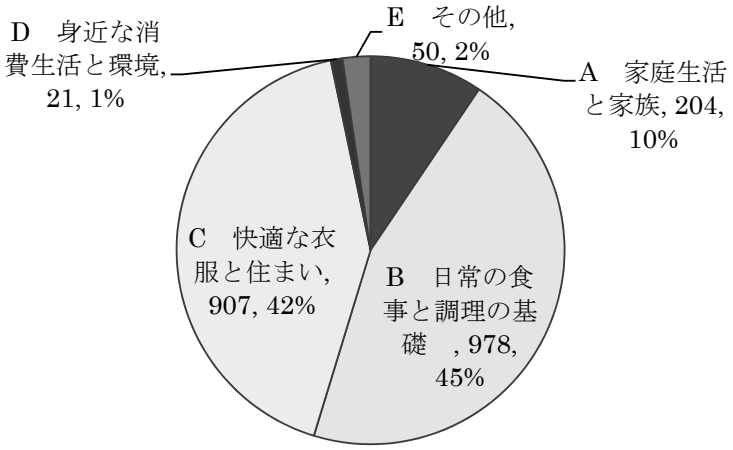

図１　分野別家事手伝いの状況

表１　家事手伝いの内容の分類

Ａ家庭生活と家族	Ｂ日常の食事と調理の基礎	Ｃ快適な衣服と住まい	Ｄ身近な消費生活と環境	Ｅその他
・親の肩をもむ ・おつかいに行く ・親の買物の補助をする ・ペットに餌をあげる ・ペットの散歩をする ・家族行事の手伝い ・兄弟のお世話 ・留守番をする ・親の荷物を運ぶ ・タイヤ交換 ・父の似顔絵を描く ・一家団欒の場をつくる ・父の看病 ・家族とお墓の掃除 ・家族旅行の準備 ・うがい薬を作る ・家業の手伝い	・食器を並べる ・食器を洗う ・夕飯を作る ・米をとぐ	・カーテンの開閉 ・ゴミ出し ・部屋の掃除 ・風呂掃除 ・トイレ掃除 ・洗濯物を畳む ・洗濯物を干す ・布団を畳む ・空調の管理をする ・電気ON，OFF ・庭の掃除 ・畑の掃除 ・モップがけ ・掃除機をかける ・アイロンがけ ・部屋の片づけ ・玄関掃除 ・湿度管理 ・衣類の片付け ・換気 ・ドアの開閉 ・ボタンつけ	・ゴミの分別	・回覧板を届ける ・天気予報チェック ・朝刊を持ってくる ・戸締り ・剣道の準備

種類，続いて「Ａ家庭生活と家族」の17種類,「Ｅその他」の５種類,「Ｂ日常の食事と調理の基礎」の４種類，「Ｄ身近な消費生活と環境」の１種類であった。つまり，多くの子どもは，料理や食事準備，食事の後片付けなどの家事手伝いをしていることがわかる。しかし,「Ｃ快適な衣服と住まい」や「Ａ家庭生活と家族」の領域については，それぞれの家庭で行っていることが違うということが言える。

この結果を，家庭科の授業や子どもの様子から考察すると，４月から10月までの家庭科の授業では，主に調理実習や栄養のバランスを考えた献立つくりなど,食に関する授業が多く行われていた。特に，調理実習がある日は，いつもより早く登校し，調理実習の準備を積極的に手伝う児童の姿を見ることが出来た。家庭科で行う調理実習への関心の高さが，家庭での「Ｂ日常の食事と調理の基礎」に関する家事手伝いの割合が高くなった要因の一つと考えられる。実際，調理実習では手際よく作業を進める児童も多く，調理から後片付け，さらに家庭科室の掃除までを完璧にこなす様子が見受けられた。家庭で繰り返し実践されていることが伺えるとともに，家庭科の調理実習で行った料理を家庭で再度作ったことをワークシートに記述した児童も10名近くいた。

また，授業の中で家事手伝いに関する呼びかけを行うことで，家族と過ごす時間について学習した後は，家族行事の手伝い，一家団欒の場をつくる，家族旅行の準備などがワークシートに記載されていたり，洗濯の授業後は，少年団や運動系の習い事をしている児童の中から，ユニフォームなどを自分で洗っているという声を聞くことができた。家庭科の授業や教師の呼びかけとの関連も考えられる。

⑵　月別の家事手伝いの回数

図２より，家事手伝いの回数は８月が962回で一番回数が多く，続いて４月の332回，５月の300回，そして最も少ないのが７月の79回となっている。

７月31日から８月24日まで，児童は夏休みである。普段の生活では，平日，休日にかかわらず，習い事をしている児童が多く，家事手伝いに時間をかけることが難しい状況にある。しかし，夏休みは，普段の生活より,自由な時間や家族と過ごす時間が増えるため，家事手伝いをする時間も，普段より多く確保できたのではないだろうか。また，夏休み中の家事手伝いを推奨するため，夏休みにも家事手伝いに関するワークシートを配布したことも家事手伝いが多くなった原因の一つと考えられる。

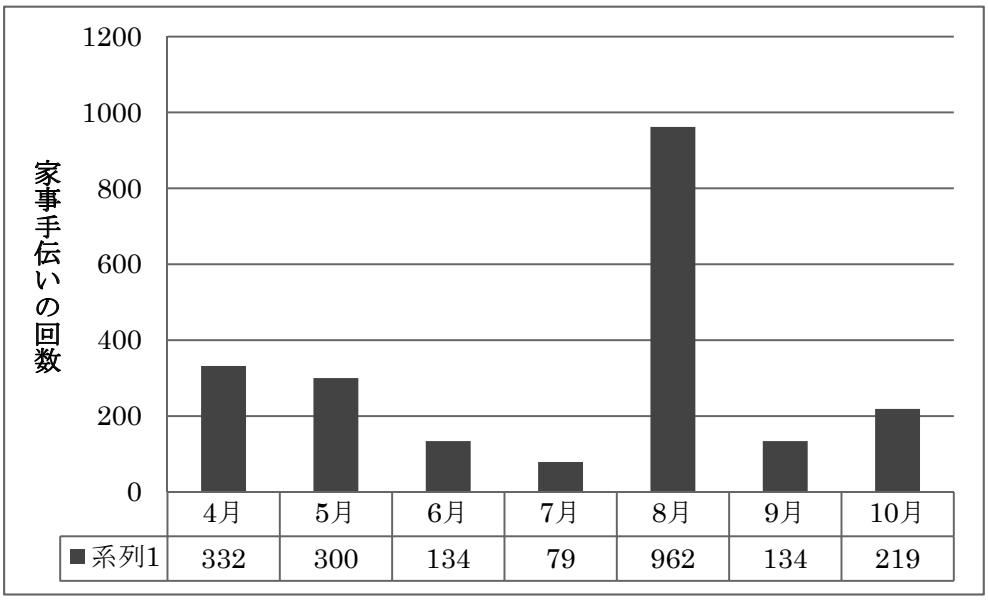

図２　月別家事手伝いの回数

４月は，取組がスタートしたので，目新しさから，子どもの家事手伝いに対する意欲が高かったと思われる。５月は，上旬に連休があることが要因として考えられる。夏休みと同様，学校が休みの日が続くと，普段の生活に比べて，勉強や習い事以外の時間を作ることができるため，家事手伝いの回数が多くなっているのではないだろうか。

一方，６月は研究大会のため，７月は学芸発表会のため，家庭科の時数が２時間ずつとかなり少なく，家事手伝いについて児童に呼び掛ける場面は少なかった。また，研究大会を控え，児童の中にも，緊張感や落ち着きの無さを感じる場面が多くあった。さらに，最高学年である６年生は，７月の学芸発表会で行う劇の台本や構成，裏方の作業，練習などを，６，７月に全て自分たちで行っていた。研究会や学芸発表会の準備が重なったことで，６，７月の家事手伝いの回数は減っていると思われる。家事手伝いは強制的に実践させていたものではなく，児童の意思に任せていたため，時間や心に余裕がない時に実践させることは難しいことがわかる。

９月，10月についても，運動会や修学旅行など，大きな行事がある週になると，家庭科の授業が少なくなり，家事手伝いの回数は減る傾向にあった。

このことから，子どもたちの家事手伝いを増やすためには，自由な時間を確保すること，子どもたちに疲労やストレスがないこと，家庭科の時間が確保されていること，教師からの呼びかけがあることが大切であると考えられる。

⑶　男女別家事手伝いの回数

図３より，どの月においても，男子よりも女子の方が家事手伝いを行う回数は多かった。男子に比べて女子の方が，授業以外の時間に家事手伝いに関するワークシートを，職員室や家庭科室まで取りに来る機会が多く，家庭科の授業以外の時間でも，家事手伝いに関するワークシートに関心をもつ児童が多かった。家事手伝いのワークシートに対する関心は女子のほうが高いと思われる。ただし，授業における実習の準備や後片付けの手伝いを行うのは男子の方が多かった。また，男子は女子に比べワークシートに対する関心が無く，家事手伝いを行っても提出していない様子や，ワークシートを提出し忘れる様子が多くみられた。ワークシートに記入してある内容と，実際の家事手伝いの実態との差を考慮する必要がある。また，学校での手伝いの様子と，家庭での家事手伝いの様子は，必ずしも一致しているとは言えない。

しかしながら，これらを考慮しても，男女差が著しいことから，男子に比べ女子の方が家事手伝いに対する興味関心は高く，家庭での実施回数も

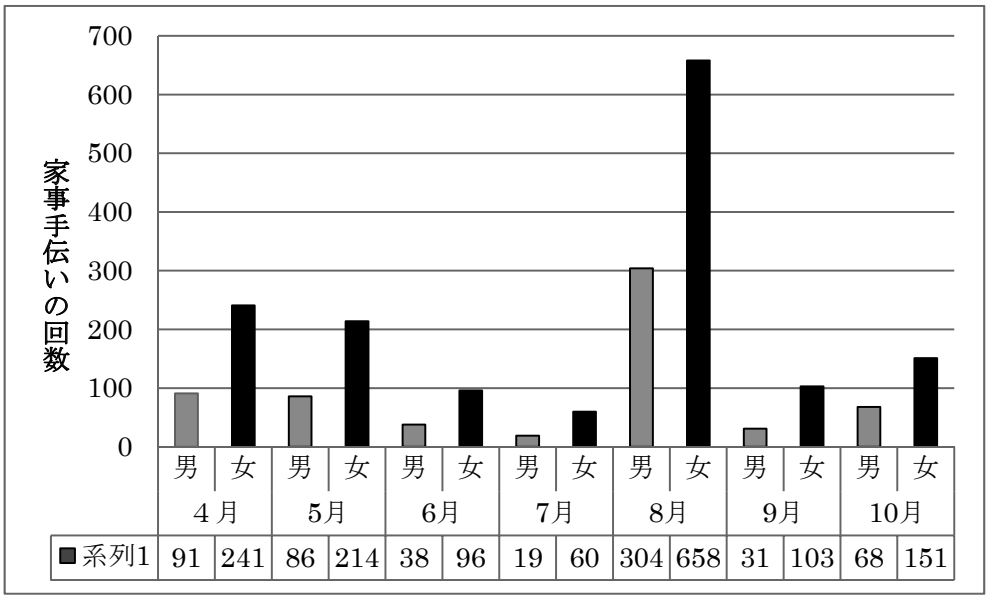

図３　男女別家事手伝いの回数

多いと言える。親の家事手伝いに対する意識が影響しているのかもしれないが，親との関係が家事手伝いに及ぼす影響について，今回の研究では明らかにすることはできなかった。

⑷　家事手伝いのアンケート結果

表２より，「どのくらいお手伝いをしていますか？」の質問に対して，毎日家事手伝いをしている自覚のある児童は52.1％，２日に１回と答えた児童は24.6％，週に１回と答えた児童は13.0％，まったくしないと答えた児童はいなかった。少なくても週に１回は家事手伝いをしている児童が全体の約９割いた。家事手伝いに関するワークシートの提出率と比較すると，ワークシートに記入していない児童や，提出していない児童がいるということがわかった。

「どのようなお手伝いをしていますか？」の質

表２　家事手伝いのアンケート調査結果（n＝69）

項　　目	人数	%
どのくらいお手伝いをしていますか。		
毎日	36	52.1
２日に１回	17	24.6
週に１回	9	13.0
月に１回	2	2.8
もっとたまに	5	7.2
全くしない	0	0
どのようなお手伝いをしていますか。		
ゴミ出し（22名），食事の準備（17名），風呂掃除（17名），食器洗い（15名）， 雪かき（13名），掃除（13名），洗濯（８名），料理（８名），食器拭き（５名）， ペットの世話（５名），米とぎ（４名），洗濯物たたみ（４名），カーテンの開け閉め（４名），洗濯物干し（３名）， 風呂のお湯入れ（３名），靴並べ（１名），ふとんをしく（１名）， 弟妹の世話（１名）トイレ掃除（１名），		
「やってみよう！お手伝い」のワークシートについて尋ねます。		
ワークシートが配られるようになって，お手伝いをしてみようと思うようになった。	8	11.5
ワークシートがあるから頑張れる。	5	7.2
ワークシートが配られる前から，もともとお手伝いをしていた。	39	56.5
ワークシートが無くても，お手伝いを続ける。	10	14.4
無回答	7	10.1
「やってみよう！お手伝い」の感想を書いてください。		
前よりお手伝いをやるようになった。（９名） 書くのは大変だったけど，自分がどれくらいお手伝いをしているのかわかってよかった。（５名） 達成感を味わうことができた。（５名） お手伝いが楽しくできるようになった。（５名） お手伝いをしても書く時間があまりなくて書けなかった。（５名） ワークシートがなくても頑張ろうと思う。（３名） 進んでお手伝いができるようになった。（３名） 書く時間があまりなかったが，たくさんお手伝いをした。（２名） お手伝いの習慣がついた。（２名） もっと手伝いをしなくてはいけないとわかってよかった。（２名） 手伝ったことを誰かに伝えると，やりがいがあって，また次何しようと思う。（２名） ワークシートを始めてから，いつもとは違うお手伝いにも挑戦しようと思うようになった。（２名） お母さんのためにがんばれて，自分も嬉しいし母も嬉しいと思います。（１名）		

問に対して，ゴミ出し(22名)，食事の準備(17名)，風呂掃除（17名），食器洗い（15名）のような解答を得ることができた。「Ｂ日常の食事と調理の基礎」と「Ｃ快適な衣服と住まい」の領域の内容が多く挙げられ，ワークシートと大きく変わる結果ではなかった。ただし，雪かきについては，13名の児童がアンケートで記述しているにもかかわらず，ワークシートの中には記述されていなかった。家事手伝いに関するワークシートを提出していなかった児童や，ワークシートを提出していた児童の中にも行った全ての家事手伝いを記入していないことがわかった。そして，雪かきの記述から，提出していないのは男子に多いことが考えられる。

「やってみよう！お手伝い」のワークシートについて，56.5％の児童が家事手伝いに関するワークシートが配布される前から家事手伝いを行っていたと答えた。続いて，14.4％の児童がワークシートが無くても家事手伝いを続ける，11.5％の児童がワークシートが配られるようになってから，家事手伝いをするようになったと答えた。家事手伝いに関するワークシートを配布する前から，約半数以上の児童が，少なくても週に１回以上は習慣的に家事手伝いを行っていたことがわかる。家事手伝いに関するワークシートが，児童が家事手伝いをするきっかけにはなることや，家事手伝いを継続する要因になる児童もいたが，そのような児童が多いとは言えない結果となった。

「やってみよう！お手伝い」の感想から，前よりお手伝いをやるようになった（９名），書くのは大変だったけど，自分がどれくらいお手伝いをしているのかわかってよかった（５名），達成感を味わうことができた（５名），お手伝いが楽しくできるようになった（５名）など，69人中38人から，家事手伝いに関するワークシートに対して肯定的な感想を得ることができた。しかしながら，感想が無い児童や，ワークシートに対してあまり肯定的な感想を持っていない児童もいた。その内の半数以上は，ワークシートを提出しており，７ヵ月間取り組んだにもかかわらず，ワークシートの効果を感じることができなかったと言える。

４．まとめ

家でどのような家事手伝いをしているのか，家庭科の授業で学習したことが，家事手伝いに生かされているのかを検討するために，小学校高学年の家事手伝いの実態を調査した。結果は，以下の通りである。

・料理や食事準備，食事の後片付けなど，「Ｂ日常の食事と調理の基礎」の家事手伝いが最も多かった。また，「Ｃ快適な衣服と住まい」の分野は，比較的取り組みやすい内容が多いため，実行する回数が高かった。
・８月は夏休みのため，自由な時間や家族と過ごす時間が増えるため，家事手伝いをする回数が最も多かった。
・大きな学校行事のある６月，７月，９月は家事手伝いの回数が少なくなっていた。特別時間割により，家庭科の授業時数が少ないこと，教師の声掛けができなかったことが理由と考えられる。
・家庭科の授業の中で行った実習に関しては，授業内容と家事手伝いの一致が見られた。実際に児童が授業で体験をすることは，家庭での実践に影響しやすいと考えられる。
・全ての月で，男子よりも女子の方が家事手伝いの回数を上回っていた。
・男子より女子の方が家事手伝いに関するワークシートに関心を持っていた。
・家事手伝いに関するワークシートを配布する前から，約半数以上の児童が少なくても月に１回以上は習慣的に家事手伝いを行っていた。
・少なくても週に１回は家事手伝いをしている児童は約９割いるが，家事手伝いに関するワークシートを記入していない児童，提出していない児童，行った全ての家事手伝いを記入していない児童がいた。
・家事手伝いに関するワークシートは，児童が家事手伝いをするきっかけや家事手伝いを継続す

る要因になった児童もいたが，必ずしも多くはなかった。ただし，多くの児童から，家事手伝いに関するワークシートに対して肯定的な感想を得ることができた。

本研究では，児童の家事手伝いの実態や，児童の家事手伝いを習慣づけるために，どのような働きかけを行っていけばよいか検討した。小学校家庭科の授業で行う内容について，興味関心をもっている児童は多く，家事手伝いに関しても同様のことが言える。また，授業で実践した内容は，家庭での家事手伝いに比較的反映しやすく，家事手伝いに関するワークシートを意識させるような指導を行うことで，家庭での実践につながりやすいことも明らかになった。しかし，宿題のような単発的な家庭での実践は習慣につながらないこともわかった。また，家事手伝いに関するワークシートについての呼びかけや回収は，週に１回のみであり，このことも，児童の家事手伝いの実態を把握する資料としては，正確性に欠けることや，児童に家事手伝いを習慣づけられない要因として考えられる。つまり，自己管理が難しい小学生に，家事手伝いを習慣づけるためには，家庭での実践を意識させる授業を行うだけではなく，教師が毎日の生活の中で，児童に家事手伝いを意識させるよう，呼びかけを行い，ワークシートを回収し評価することが必要であると言える。教師は普段の業務に加え，このような指導を行うことは，負担になると考えられるが，子どもの頃の豊かな体験や家事手伝いの有無が，将来，大人になったときの人間性や社会性に影響していることを考えると，子どもが充実した人生を送っていくためには，このような配慮は必要不可欠なのではないだろうか。

今回の研究では，家事手伝いに関するワークシートなどの調査方法や正確性，また子どもの家事手伝いに対する，親の意識調査を行う必要があることなど，多くの課題が残った。今後は，児童の家事手伝いの実態を把握するための調査方法についてさらに検討し，児童に家事手伝いを習慣づけるための，効果的な小学校家庭科の授業研究や指導方法について検討していきたいと考える。

引用文献

1）明石要一，青山鉄兵，岩崎久美子，金藤ふゆ子，茅野敏英，土屋隆裕．子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書：子どもの頃の体験は，その後の人生に影響する．国立青少年教育振興機構，2010. http://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000077964.pdf.（入手日：2017.2.22）

2）深谷昌志，深谷和子，石川達子，三枝恵子，滝渕寿，茅野一郎，谷野敏子，上島博，木瀬達也，中川貴三子（子どもの行動学研究会）.「子どものお手伝い」を考える―Kao（花王）．2011. http://www.kao.co.jp/lifei/info/110804/pdf/fukaya_info.pdf.（入手日：2017.2.22）

3）洲脇史朗，宮地功．算数が好きになる要因から見た日本の小学校算数教育への提言：第３回国際数学理科教育調査を用いて．教育情報研究: 日本教育情報学会学会誌．2000，16(2)，3-12.

4）高橋睦子，山本玲子．子どもの食事の準備や後片付けと関連する家庭内因子について．尚絅学院大学紀要．2013，16，61-73.

5）山口県教育委員会.「家庭でのお手伝い」に関するアンケート結果．2009. http://www.pref.yamaguchi.lg.jp.（入手日：2017.2.22）

6）青木直子．就学前後の子どもの「ほめ」の好みが動機づけに与える影響．発達心理学研究，2005，16(3)，237-246.

7）田中昭夫．児童の家庭内での手伝いが社会的責任性に及ぼす効果．日本教育心理学会総会発表論文集．1994，36，63.

8）横溝美由貴，北川麗香，片山勢津子．住まいにおける子どもの生活力に関する基礎研究．日本建築学会発表集．2011，129-131.

9）梅田優子，大桃伸一．両親のとらえた子どもの生活と遊び：家庭でのお手伝い．日本保育学会大会発表論文集．2004，57，922-923.

10）正岡さち．家庭における「食育」の場としてのキッチン．島根大学教育学部紀要．2010，44，105-109.

11）水津久美子，穴井恭子，中村さゆり，山本真弓．児童の食生活に関する実態と保護者の意識との関連性：児童の元気創造を目指して．山口県立大学生活科学部研究報告．2005，31，29-40.

12）文科省．小学校学習指導要領解説　家庭編．東洋館出版．2008.

（岡田みゆき　旭川校教授）
（杉浦　麻佑　岩見沢東高等学校非常勤講師）